

四川省大凉山彝族民俗調査中間報告

飯島吉晴[※]

I. 歳時儀礼

大凉山彝族は、漢化の程度が低く、独自の民族文化を濃厚に残している点で、極めて興味深いフィールドといえる。昨年度と今年度の二年度にわたった麗江地区の納西族は、三十万弱の文字通り少数民族であるだけに、彝族とは対照的に積極的に漢化や教育を推進することで政治的社会的に自民族の存在をアピールすることに努めてきている。これに対して、今年度から調査を開始した彝族の場合は、衣食住といった生活面ばかりでなく、宗教や儀礼などの精神文化の面においても、その独自の伝統的民族文化を強く保持し続けているという印象を強く受けた。これには、漢族が通常定住生活を営まない急峻で冷涼な山岳地帯に好んで生活し、また人民解放軍によって解放されるまで独自の社会構造と文化を維持してきたことも背景にあると考えられる。彝族では、民家の間取りや囲炉裏に特色がみられるだけでなく、大門に門神や対聯を貼る漢族的な風習がなく、また茶を飲んだり死者を埋葬する墓を持たないことをみても、漢族からの影響が少ないことがわかる。圧倒的な漢族の文化の中にあって、大凉山彝族は物質生活面では恵まれていないが、いまだに民族文化を生きた形で主張しつづけている姿は外からみる者には感動的ですからある。

彝族の歳時儀礼をみても、春節はじめ漢民族の行事をほとんど受け入れておらず、今回の調査地区である美姑県では他地域の彝族が行っている火把節（松明祭り）もなく、独特の彝族の過年（正月行事）はあるものの、極めて行事の数が少ないのが大きな特色になっているといえる。また行事や儀礼の細かい日取は畢摩（ピモ）などに吉日を占ってもらって決めることが多い点も注意される。

①美姑県三河村。話者は、金曲比俄（65才）

・クセ＝庫施。彝族の過年。以前は新暦12月5日～12月15日のうちの吉日を選び3日間行ったが、現在は11月1日～11月15日のうちの3日間になった。畢摩に吉日を選んでもらうが、択日の見方はクセトウイという經典にでている（ク＝歳、セ＝選択する、トウイ＝經典の意味）。まず北極星を見、つぎにズ、ラ、ルーコテビという3つの星座を総合的に見て日を選ぶ。過年だけでなく結婚式や祭礼の日取も同様に選ぶ。したがって、択日を担当する畢摩が異なると新年の日取も異なる場合がある。

解放以前は彝族の過年は収穫後の12月の行事で、それまで豚を太らせておき、すべての仕事を終えておく。たとえば、新年の19日間は碾（うす）を使用してはいけなないので、前もって蕎麥などを粉に碾いておく。囲炉裏でもやす燃料も用意しておいた。彝族の過年は3日間で、豚を

※天理大学文学部助教授

煮たものを必ず暖めてから祖先に供えた。

- ・大晦日の日には道具を洗ったり、すべての穢れを払ったりする。この日に鶏を殺す家もあるが、どの家でも殺すわけではない。しかし、豆腐料理は必ず作る。また苦蕎麦を丸めて湯でさっと煮たものと、肝臓を煮たものを祖先に供える。御飯やトーモロコシは大晦日の前に用意しておく。焼いた石を水に入れて蒸気をたてて穢れを払う儀礼をアチャース（爾擦蘇）という。まず一番きれいな所から取ってきた石を用意し、囲炉裏で赤くなるまで焼いてから水の入った椀に入れ蒸気をたてて除穢の儀礼をする。通常畢摩を招いてするが、いない時は主人がする。もし主人であれば、蒸気をたてながら、時計回りに囲炉裏をかつての奴隷の座からまわり、次に屋内の四隅をまわって穢れを払う。もし家畜がいれば、家畜の穢れも蒸気でもって払う。終わると、大門や戸の外にこれを払い捨てる。また豚を殺す刀子や糸、竹で編んだルーオウ（豚の下に敷くもの）などの道具も同様に除穢しておく。
- ・第1日目はクセ（庫施）といい、祖先と一緒に過ごすために祖先を迎えてくる日で、この日に豚を殺す。豚は村の若者がチームを作って、祖父、父、娘というように年配者の家から順に殺して回る（若者の人数は必ず奇数にする）。豚は家の外で殺し、毛を焼いて取り除く。このために、タブ（ぜんまい）という草を用意しておく。タブは生命力の旺盛なことから吉祥の模様としてさまざまな器物や衣服、幼児用の帽子などに描かれ刺繍される。殺した豚は小さければ背負って、大きければ運んで正房のルーオウの上に置き、内臓を取り出す。これには一定の順序があり、また家支によって作法が異なる。曲捏（チュネ）の家支では、豚の左肩を切って右の尻に置き、次に右足を切って左肩に置く。古侯（グホ）の家支では反対に、右肩を切り取って左の尻の部分に置き、左足を切って右肩に置く。この二つの家支は民族移動の途中で金沙江を渡る際にふたてに分かれて移動し再び涼山で再開したとされ、囲炉裏の石の方向や帽子の飾りの位置にも家支によって違いがみられる。このあと、まず豚の脾臓を出して占い、部屋に掛けてある竹にかける。次に腸や胆嚢を出して同じ場所にかける。豚の脂身も同様にかける。肝臓を出して煮たあと、半分に切って家屋の祖先の霊牌（位牌のことだが、あるとは限らない）を祀るところに供える。心臓、肺臓、舌も出して一緒に煮て、やはりできれば煮たものを少しずつ取って祖先に供える。内臓を出したあと、豚の腰の部分を取り取り、頭や尾も取る。そして豚の上から下まで二つに切りわけ、最後に頭を二つに切る。かつて土司の管理していた地域では、豚の内臓を出したあと、柱に豚をかけ線を引いておいて翌日二つに切るという。
- ・第2日目をドボ（多博）といい、祖先が帰ってきて楽しく穏やかに過ごす日である。
- ・第3日目をアプチュ（阿甫博基）といい、祖先を送るという意味で、祖先が帰る日である。この日は日の出前の朝4時頃に起きて、御飯を作って祖先に供え、鶏が鳴いた後に送る。
- ・ソジョ（春節）。ソは過ぎる、ジョは回るの意味で、古い年は過ぎ新しい年が始まるという意味となり、春節のことを指す。特別の行事はないが、彝族の新年で残った豚肉を使い、豆腐料理を作って春節を祝う。農曆1月1～3日。美姑だけの風習ともいう。彝族の正月は必ずするが、春節はしなくてもよい。2回正月をすることになるので、年が判らなくなるおそれもあり、

統一したほうがよいという。

- ・ニジャス。農暦3月に燕が渡来した後、「古いものから離れて、新しいものを迎える」という意味のニジャスという儀礼を各家ごとに行う。畢摩が担当する。

まずジャソという儀礼をする。これは「お返し」の意味で、たとえば人を殴ったり、またその種のことを返すということ。

もう一つはイツという儀礼をする。これは、魂をものやお金を出して他のものと代える意味で、畢摩の儀礼である。

そしてイクという儀礼をする。魂を招くという意味である。

最後にイボという儀礼をする。畢摩が主人の席に座って、主人の魂を呼び寄せる。

この儀礼では生きている鶏によって占いをする。まず、経を読み、魂を招き、主人は少し下に座って、首をひねって鶏を殺す。囲炉裏で羽毛を焼き、鶏の嘴（頭）と足の皮は焼かないように気をつけて取る。洗う所も決まっており、内臓も出したら捨てずに囲炉裏で燃やす。残った鳥の肉と苦蕎麦と一緒に鍋で煮たあと、すべてを出して盆に入れ、畢摩に占ってもらう。畢摩は最初に鶏の舌の骨を出して吉凶を判断する。筋のような細い軟骨で、その曲がり具合で、内側に曲がっていれば財産がたまる、真っ直ぐだと財産が出やすく、外側や曲がり過ぎていると貧乏になり悪いという。次に鶏の頭の骨の色が白いかどうか皮をとってみる。白ければ吉であるという。最後に、足の骨を2本取り、竹の針を2本ずつ差し込み、互いにバランスがとれているかどうかで吉凶を判断する。

- ・ジチュ。農暦6月に日を選んで行う。ジ＝「敵」、チュ＝帰らせる、戻らせることで、全体では「逆呪い」すなわち「反呪」の意味になる。やはり畢摩に儀礼をしてもらう。誰かが裏で密かに自分を呪っているとわかると、その呪いの言葉を相手に返す儀礼である。これは複雑な儀礼なので、詳細に関しては畢摩に尋ねる必要があるという。

- ・チュイツ。農暦9月の秋の収穫後に行う。チュ＝秋、イ＝魂、ツ＝（魂を）交換することで、全体では秋に魂を交換するという意味になる。夏期には放牧に行ったりして魂が落ちやすいので、秋になってそれを呼び戻す儀礼である。羊や豚を殺して魂を交換する儀礼を家で畢摩をする。

- ・彝族の新年以外の3つの儀礼や行事は、各家単位で行い、その家族は必ず儀礼に参加する。もし不在の場合には、その人の衣服を代わりに使用する。高山地区は3つの季節しかないので、この3つの行事をそれぞれ行うのだという。

- ・村に疫病が流行ったり、雷に打たれたりした場合には、村全体で儀礼をするという。雷で雷死した場合にはツチという儀礼を行う。流行病の場合には、たとえば下の村で疫病が流行すると、疫病の侵入を防ぐために畢摩を招き、各家からお金を集めて必要な場合には牛を殺して儀礼を行うという。平らな場所を選んで儀礼をし、各家から破れた靴または箒のどちらか一つを出して貫つて村の入口に縄を張って吊し疫病を防ぐ（日本の「コトハ日」の行事に類似しており、興味深い）。

- ・なお、美姑地区では「火把節」（松明祭り）は行っていない。これには、土司の決定があつてしないのだという由来伝説があるという。
- ・ユフジェ。解放以前に、9月1～5日に行っていた。ユ＝高山、フ＝羊、ジェ＝回帰ということとで、全体で羊の毛を取るという意味の儀礼である。これは、彝族の遊牧の習慣と関連している。夏には暑さを避けて高山に行き、冬に入ると羊を連れて帰る。そして帰ったら、鶏や羊を殺して祝うのである。この日には山羊は殺してもよいが、羊は殺してはいけないという。放牧してきてくれた人に、酒を用意し、蕎麦パーパを作る。放牧する人への謝礼は羊の毛で、羊の所有主はその肉をとる。羊の売買の決定も放牧する人にあり、勝手に羊を売ることはできない。もし羊毛が必要な場合はその人から購入しなければならないという。彝族の放牧の方法には2種類あつて、一つは低地の彝族が高地の彝族に任せるもの、今一つは他の人に羊を任せて放牧してもらうものである。

なお、儀礼の犠牲獣としては羊は人を招く場合に使用し、山羊は人を呪う場合に使うという。

②美姑県基偉村。話者は沙馬一洛（38才）。

- ・クシ。彝族の過年（正月）。公暦11月5～15日の間に3日間祝う。畢摩に吉日を選んで貰う。クシは古い年を送るという意味である。正月の間、主人夫婦は囲炉裏の側に寝て、3日間囲炉裏の火を絶やしてはならないともいう。
- ・ジョロチ。初一の前日（大晦日）のことで、一年の終わりの意味である。この日には大掃除をする。すべての食器を洗うが、衣服を洗う人もいる。また豆腐と蕎麦パーパを作る。前年の豚肉を一条残しておき、豆腐と一緒に煮る。出来上がると、まず祖先に供える。
- ・初一（元日）をクシという。鶏が鳴いた後、起きて簡単な掃除をする。丸くて小さな蕎麦パーパを煮る（これは蕎麦粉を水でこねて湯でさっとゆがいた蕎麦のパンケーキ状の食べ物である。）蕎麦は彝族の最初に導入した農作物であり、種々の儀礼や正月には必ず使用する。この日には、豚を殺す若者のチームがやってくる。村の年配者の家から順に殺してあるき、最後は一番若い世代の家の豚を殺す。

まず、焼いた石を椀の水に入れて蒸気を出し、これでナイフ、包丁、縄など豚を殺す道具を清める。これはアチャース（爾擦蘇）と呼ぶ除穢法式である。豚を殺したあと、蕨草（ゼンマイ）を燃やして毛を焼き除き、豚をきれいに洗う。解体にも一定の順序がある。最初に、舌の部分を全部取り、次に肩の部分切る。右肩から先に切って左足の所に置き、次に左肩から切り右足の所に置く。足も右足から先に切る。昔は、切った左足を右肩の所に、右足を左肩の所に置いたが、今はしていない。

この後、腹の部分の皮を四角に切って、脂肉の真ん中に一筋切り入れ内臓を出す。まず最初に脾臓を取り出してその形で占う。表面がつるつるとして、長くて細いものがよいという。この脾臓は右側の肩肉と一緒にしばって煮る。

次に、食道の部分からすべての内臓を取り出す。まず肝臓を取り出したあと、胆嚢を取って、胆汁が多いかどうか、色が黄色かどうかで占う。汁が多いほど、また黄色であるほど吉（縁起

がよい) であるという。そして肝臓を鍋に入れて煮る。

それから、胸から上の肉を半分に切って煮る。肩肉と脾臓を煮たものおよび肝臓を半分に切ったものを祖先に供える。

胸部の一番下の骨から下の部分を切り、次に耳を頭につけた状態で耳の所から切る。

こうしてから、足の大きな骨の部分から尾の部分を作り、尻の部分も骨から半分に切ってこれらを細かく切って煮る。尻から上の部分も縦半分に切り、頭も半分に切る。これらは全部で7つの部分になる。

初日には、正月の半月前から仕込んでおいた泡水酒を飲む。この酒の作り方は、桶(ジュイ)に発酵した糧食を入れ、泥を上にかけて封じる。飲む時は、泥のフタをあけ、水を入れて、2〜3時間おくと飲めるようになる。御飯をたべたあとに飲むが、まず酒をだして容器に注ぎ祖先に供える。祖先を祀る場所をハクガハ(ガハは上側)と言い、囲炉裏の主人の座の後ろの部屋の箱の上にも供える。ただ方向だけを意味し、箱の上のその方向に祖先への供物を供えたりする。汚いものは決して箱の上には置かない。

- ・初二をドボ(多博)という。新しい年の第一日目、あちこちに相互にお祝いに行く。なにも持たずにただ御馳走を食べに行く。第一日目の料理を必ず暖めてから祖先に供物として供える。正月は三日間とも供える。

この日に、15才以下の男女の子供たちは煮た豚肉(男子は2本の肩の肉、女子は尻の肉を一条)、酒、豆腐をもって山に行き食べる。この行事はアイシュグといい、子供の集まりという意味で、新年が順調に行くことを祈る。一緒にいった大人は、遊び場で大きな石を見つけて果実のなる木の下におく。この石や木に子供たちは細かくした肉や酒を供える。また、天空に向けて肉や骨を投げ、鷹が鶏を取らないように祈る。

- ・初三をアブチェといい、これは祖先を送り出す意味で、祖父の意味もあるという。やはりお互いにお祝いに出かける。午後3〜4時頃に祖先を送る。豚の心臓・肺・腸を湯にさっと通して祖先に供える。これは祖先が帰りの道につきましたという意味である。
- ・第四日目はウォロビという。これは背負うという意味である。殺した豚の肉を背負って妻の両親の家や年配者の家、親しい人の家などを尋ねていくことで、敬意を表すのである。豚肉を差し上げると、相手はお礼として羊一匹やお金をくれることもある。一番重要な家は妻の両親の家で、妻の兄弟が多ければ頭の半分も加えるという。

③美姑県基偉村。話者は阿着阿鉄(51才)・恩扎果果(46才)夫妻。

最近、民家を新築したばかりだが、伝統的な建築法が使用されている。家具らしい家具はなく寝台と囲炉裏が目立つ程度であった(まだすべてを搬入していないからかも知れない)。食器も洗面器を共用器として使い、御飯、スープ、塩とトウガラシで鶏を煮たものの3つが出され、手や木杓子で食べた。主人は「相撲取り」というだけあって立派な体格で伝統的な衣装をつけて迎えてくれた。妻も美人(彝族は首の長いのを美人だといっている)だが、労働がきついためか日本人から見ると年齢よりも老けてみえる。民家の周囲は土壁で囲まれ、出入口のそ

ばには敵への物見櫓が設けられていたのがめずらしかった。正月以外の行事と出産から結婚までの儀礼の概略を教えてもらった。

- ・ショチュ。外から来た鬼を帰らせる儀礼。春節の時期に行う（公暦2月から一ヶ月以内に）。第1日目には、正月の時の残りの豚肉一条と豆腐とを一緒に煮て祖先に供える。第2日目にこれを主人が食べることができる。
- ・ジイチュ。敵からの呪いを返す儀礼。公暦の7～8月に行う。日柄は畢摩が決める。羊の日が吉日で、間に合わなければ次の羊の日まで待つ。十日一巡りでやってくる。日を択ぶ際には、シチョギグの日にすることもある。これは蛇（巳）の日のことで、漢族の干支に由来し61日目に蛇（巳）の日がくる。儀礼の10日前に、伝統的な酒を準備する。その家の経済状態により、犠牲にする家畜によって4つのレベルに分かれる。第1はルシルマで、羊・山羊・豚・鶏を殺す。第2はソシソマといい、羊・豚・鶏を殺す。第3はニシニマといい、豚と鶏を殺す。第4は鶏だけを殺すものである。儀礼は畢摩を招いて行い、一日で終わる。なぜこの儀礼を行うのかというと、7～8月になると暑くなり、盆地では疫病が流行するので、こうした病気にならないようにするのである。今一つは敵の呪いを返して、家の主人や家畜の健康、五穀豊饒、子孫繁栄などを祈るために行う。
- ・その他に、5月1日の労働節には若者が晴着を着て町に行き、また5月4日の青年節には学生たちが集まる。
- ・農耕儀礼。種を蒔く時には別に儀礼はしないが、吉日を択んで蒔く。彝族の暦でナリといって、何の災難もないよい日を択ぶ。何かをするのによい日がシノで、シノのあとにナリがくる。今の暦は公暦と同じく12ヶ月であるが、彝族の暦は複雑で説明するのが難しい。十日で一巡し、これと十二支を合わせると干支と同じく60日になる。十日の順番は、シノ・ナリ・ナリ・ク・クノ・ナリ・ナリ・ジョモ・ジョズ・シイジョであるという。

II. 治病招魂儀礼

美姑県合姑洛郷。話者は、畢摩の井吉漢日（29才）。この話者は13才から祖父や父親について畢摩の修行を開始し、17才の時に畢摩になった。祖父は吉机魯普という涼山で一番偉い畢摩であったといい、父親は井吉是達（48才で死亡）といってやはり美姑の有名な畢摩であった。話者の畢摩は若いが、布を頭に巻き普通の人とは異なって目が鋭く中国将棋でも滅法強さを発揮していた。ただ彝語のみで、中国語は話せない。

一番最近行った儀礼に関して問うと、昨晚（1995年9月24日）巴普鎮の伍爾児哥という家でナンゴイツピ（治病招魂儀礼）をしたと答えた。患者は11才の女子で8カ月もの間、頭がフラフラして腰が痛く身体がだるいという症状がつづいていたという。そこで、まず患者の生年月日及びいつ（年月日）病気になったのかを經典から計算するとともに、羊の肩甲骨を焼いて病気の原因を判断した。これによって、患者の魂が身体から脱け出てしまったことが原因であると判断し、処置としてナンゴイツピ（治病招魂儀礼）をすることにした。これは羊と鶏を殺して招魂する儀

礼である。

まずいつ儀礼を行うかを定めるために、5日前に卵を使って卜占して日を決定した。卵に針を差し込んで穴をあけ、ごろごろころがしてから、患者が息を吹き込む。畢摩はその卵を受け取り、卵を割って黄身と白身をそっと椀の水の中に入れる。卵の泡の大きさと模様（図案）で、どんな病気でどんな鬼が崇まっているのかとか、日柄を判断したりする。

病気の種類がわかると、そうした病気に対して樹木（楊柳）の枝（儀礼を行う道場をこれで作る）や茅草一束（チョロガサと称する草人形を作る材料にする）を用意する。まず神樹（ク＝古）をさして道場を作り、さらに泥を使ってツチザボという人とも犬ともつかぬ泥人形も作る。家人は羊を連れて家の中に置いておき、鶏は畢摩に手渡す。こうして準備が整うと、儀礼が開始されるが、その過程は次のような順序で進められる。

- ①草を燃やして煙を出す。⇒ムクツ（母古此）。儀礼の正式な開始を意味する。
- ②火から焼いた石を取り出して椀の水に入れ蒸気を出す。この蒸気で儀礼に使用する道具類を除穢する。⇒アチャース（爾擦蘇）。蒸気によって穢れを除去すること。
- ③同時に畢摩は経典を読み始める。まずソソムという経を読む。これは家神を招き込むとともに家の中の鬼を追い出す意味がある。次にモシモ（莫色木）という経を読み、患者の名前を経に読み込み神霊に知らせる。さらにモシビエ、カハブ、ディビピという経を読んでしばらく休息する。
- ④水を汲んで母鶏（メンドリ）を持って口と足を洗い、柏樹の枝、茅草一束（草名はジール＝日二）を用意する。それから、患者の身体を離れている魂を招き込む儀礼を行う。まず魂を招く経を読み、次にジョピトという経を読む（ジョビは畢摩の聖者、イトは魂を覚まし起こす意味）。このあと、畢摩は自分の法具を持ち出し、立ってイシャという経を読む（それまでは畢摩は座っていた）。それが終わると、水を用いて羊の身体に掛ける。一回目に水を掛けて羊が身体をゆすれば、魂がついたことを表す。次に水を掛けて羊がまた身体をゆらせば、患者の病気がなおったことを表し、身体が二回ゆれるとよいという。
- ⑤ここまでは家屋の中で儀礼を行っていたが、次には家から出て、その外側にチョーという竹で編んだ羊を入れておく垣を作って主人たちがその真ん中に座る。その回りを羊をつれて時計回りに3回まわる。それが終わると、患者や家族たちは反時計回りにまわって再び家の中に戻るが、患者たちは羊と鶏の下をくぐって家に入る。畢摩は公鶏（オンドリ）、柏樹、茅草（日二）を持って家に入るが、鶏は家の中に放ち、その他のものは囲炉裏のそばの柱に差し込む。
- ⑥家の人々は囲炉裏のそばに座り、その上を羊は9回、公鶏は7回時計回りにまわす。患者以外の家族は各自の席に戻り、患者のみがその羊と公鶏で身体を3回なでまわす。一回まわる毎に、患者は羊の口に息を吹き込む。そのあと、羊は声を立てないように首を絞めて殺し、公鶏は畢摩がナイフで殺す。ツチィ（悪鬼を象徴する人形）や、チョロガサ（草人形）、ツチザボ（泥人形）などに、殺した公鶏の血を振り掛け、羽毛も抜いてつける。こうして、畢摩は公鶏を家の外に向けて投げる。鶏の口が右側に向き、頭が入口に向けば吉である。外に向かって投げた

公鶏が吉の方角にならなかった場合にはもう一度やりなおす。もし何度なげてもだめならば、今回の儀礼は放棄して主人にこれこれの儀礼をするように教示する。

⑦そのあと、羊と鶏の肉を切る。まず羊の肺臓を取って息を吹き込み、患者の病気がどこにあるか判断する。肺の悪い部分を切って、チョロガサヤツチザボの各人形の口につけ他の部分は食べる。それから羊の内臓、鶏の内臓、内臓を取った鶏を一緒に煮る。食べる前に肝臓と腎臓を取り出し、草人形と泥人形の二つの人形に少し食べさせる。この儀礼はシフズという。そのあと、二つの石（ローツァン）を焼いて各人形の前に置き、羊の脂をとって石に塗りつけて焼く。畢摩はスシザボチョルチという経を読み始め、この二つの人形を送る儀礼を行う。人々は人形を時計回りに3回まわり、患者の首に結びつけておいたヒモを二つの人形の頭に縛って、患者のもつ方角（女性の場合、北から反時計回りに八方位を順に巡るので、この11才の女子の例では西方がそれに当る）に人形を送る。それから、羊の肉を煮る。畢摩はもう一度神枝（イゲモゲ）を挿し込み、魂を招く経（ジツジシエ）を読む。最初の母鶏を畢摩に手渡して経を読んでもらう。穴をあけて中身をとった卵を家の入口におき、1メートルほど離れたところに白布で覆った木椀を置いて、その前に畢摩が立つ。まず白糸をつけた日二（ジール）という草を卵に差し込み、白糸の先には針をつけて木椀の上の白布に挿す。木椀には、卵の中身を炒めて餅のように丸く料理したものや、羊の肝臓や蕎麦パーパを少々入れる。それらの両側に神枝を挿し、水、羊の頭や皮、羊の肉やスープなどをまわりに供える。魂を招いた後、母鶏を主人に渡し、大切に育ててもらおうようにする（売ったり、鷹に取られたりしないように気をつけ、殺す時もナイフを用いずに首を絞めて殺す）。この儀礼では他と異なり、主人がはじめに一口食べてからみなが食べ始める。

⑧食事を終えると、畢摩は鬼払いの経を読む。その時に、樹枝（何の木でもよい）を三つに折り、前に用意しておいた悪鬼の人形（ニュツボともいう）にしばって、鬼を追い出す。これが終わると、ツキチュという経を読む（ツキは祭壇の上ののせたもの、チュは送るという意味）。そして、家族の者が首に結びつけていた麻のヒモ（ムシショシ）を取って、その頭上を7回まわす。最後にグズワズという経を読み、ジョビングという木の枝にヒモをしばり外側に持ち出して、この儀礼を終える。昨晚は、この招魂と平安の儀礼（ツソマソビ）の儀礼を行ったのである。

Ⅲ. 通過儀礼

美姑地区の彝族の出産、成女式、婚姻、葬式の概略に関して、簡単な聞き取り調査を行った。葬式は、遺体を火葬して位牌（馬都）を作り家で祭る過程と、ニムツビと称する位牌を山の洞窟に納める祖霊化の過程があり、後者は複雑な儀礼とされており十分に調査できなかった。この地区では遺体を埋葬する墳墓を特に作らず、火葬して先祖の霊を送ったあとはそこを畑として耕作できる。そこでできた最初の作物は、耕作者本人しか食べることができないのだという。村では一定の火葬場があるといい、火葬の際に女は石を7つ、男は石を9つ置くといい。彝族の葬送儀

礼の調査は、彝族の靈魂観や世界観を知る上で極めて重要なものと考えられる。

①美姑県基偉村 話者は阿着阿鉄（51才）・恩扎果果（46才）夫妻。

[出産]

- ・性に関する話は男性だけがいる場です。女性はその場を避けるといい、こうした方面の話はやや聞き辛いものがある。出産の前日には、息子が欲しいと祈る。これには一定の卜占の仕方がある。天・地及び八方位の計十方位を、東・東南・南・南西・西・西北・北・北東・天・地の順で生日に当てはめて行く。もし、子供の生日（誕生日）が天と地の方位であれば、ディニツという儀礼を行う。これは豚を殺して行い、もし地に当たっていれば豚の糞を出して地に埋め、もし天に当れば天の軒にかけるといふ。
- ・またとても恐ろしいレクテビという怪物が空いっぱい飛んでおり、この怪物の両羽、頭、尾はそれぞれ四方を指している。レクテビは時計回りに飛んでおり、月のはじめに東に向いている。1日は東、2日は東南、3日は南、9日は天、10日は地にある。下弦の月のときは西北にいていい、一ヶ月で6日間が天と地になっている。
もし生日がレクテビの口や羽の方位に当たっていると、はさまれる恐れがあるので儀礼を行って避けるという。また生日がレクテビにあわず吉日で、子供の性別も希望通りであったならば、とても喜んで牛や羊を殺して祝いをするという。
- ・産室。石臼が置かれているトゴという部屋で出産をした。草で編んだ蓆を敷いて出産した。近隣のお産に詳しい婦人を招いて手伝って貰い、女性だけで男性は入れずに行く。胞衣は野原に行き埋めるといふ。
- ・生後3～7日の間に太陽の光を見せる。これをアイヘトという。はじめて生児は外を見る儀礼なので、好天だと成長が順調でその生涯にもよい影響がある。
- ・命名。日は一定しておらず、5日または7日にしたり、満月の場合もある。もし生日が地なら5日目、天なら7日目と早く命名し、正常な日であれば満月にするという。まず儀礼を行って名付けするが、畢摩を招いたり、近隣から子孫の多い人を招いて名付けすることもある。命名の際に、主人や近隣の人を頼んで象徴的に生児の髪の毛を切る。髪の毛の状態によって異なるが、左右両脇の髪を残したり、前髪の所を残したりする。
前髪は一生残すのが伝統的で、2メートル位の長さの人もおり、マゲにしている。これを「天菩薩」といふ。このように長くするのは、子供の頃あまり健康でなかったからである。女性は前髪と頭頂の髪を残す。8～9才で一度髪をすべて切ってしまう、それから一切切らずに伸ばすという。これは髪を伸ばすために行う。長くなると一本のおさげ髪にする。
また1～2才で耳にピアス用の穴を開ける。男子は左耳に、女子は両耳に開ける。経済的な能力があれば、5～6才になった時にメノウを買って耳につける。子供の時には小さいものをつけ、年齢とともに大きなものにする。

[成女式]

- ・17才になると、姉妹や近所の友人を招き、一本のおさげを二本のおさげにする。裙子（スカー

ト)の柄も、子供の時には3段の真中の糸が白だったものが、成女後には4段で、真中が赤、黄、マダラになる。頭のかぶりものも、出産前はパーツ(瓦のような布)をかぶり、子供を産んだ後はオーア(八角の布)をかぶる。この成女式の時に、木、石、白などに象徴的に嫁にかせる儀礼をする。たとえば、白と結婚する場合には、白のそばに成女をたたせて、年寄りの女性がどういふふうに暮らしてくださいなどといろいろ話をしてその式を担当する。性知識を授けたりすることもあるという。

[結婚式]

・まず婚約するのが、結婚の前提になる。黒鼻か白鼻かなど双方の家柄が一致するかどうか、また生まれた年月日などもみて仲人が説得する。その後、もし双方が同意すれば、男性側が奇数の人を連れ酒をもって求婚する。来る前に、女性側はバケツに水を入れておき、男性側が着くと水を掛け、囲炉裏の灰を顔に塗りつけていじめる。女性の家の経済的状況によって、どの家畜を犠牲にするかを決める。この夜は、豚を殺して脾臓と胆を取り出して占う。もし吉と出れば、男性側はお金を持ってきているので、それを女性の親に手渡す。不吉(凶)であれば、この結婚話は終わる。

・次に、日柄を見れる人を頼んで結婚の日取りを決める。双方の家の距離は、遠い場合には2～3日かかるが、男性側は兄弟(奇数の元気な男)を頼んで、豚を殺し酒を飲ませて嫁を迎えに行く。男性側が到着すると、女性側の姉妹がやはり水を掛けていじめる。

結婚式の前日、女性は姉妹を招いて御馳走を食べさし、それらの女たちは夜通し「泣き嫁」という歌をうたう。当日は、女性たちが合唱しながら、嫁の二本のおさげ髪を一本に戻して金銀の飾りをつけ、きれいな衣服を着せる。花嫁は結婚の際にオチェという特別の帽子をかぶる。男性側から代表を一人選んで、嫁を象徴的に背負わせる。その男性は顔に囲炉裏の灰を塗って背負うという。家の経済状態により、花嫁を馬に乗せて男性の家に連れていく場合もある。

・男性側は、花嫁が着く前に、家の外側に新しい木で小屋を作っておく。花嫁が来ると、その中に座らせる。この儀礼では、豚を殺して煮、一条の豚肉を取り出して花嫁の頭のまわりを回してから食べさせる。またこの小屋の中で花嫁の髪を二本のおさげに戻す。花嫁の髪をなおす間、男性側の友人や親戚は歌ったり踊ったりする。このあと、花嫁は実家に帰る。嫁が帰る際には、羊を1～2匹縛って持ち帰る。新郎が花嫁と一緒に帰ってもよいし、行かなくてもよい。その夜、ヨナグといって持ち帰った羊を殺して食べる儀礼をする。翌日、新郎は花嫁を連れて帰る。

②美姑県巴普区爾古村 話者は巴普村書記の吉吉拉蒙(42才)。

[葬式]

・ジェムジェシゴ～人が亡くなると、まず親戚に知らせる。

・モジチュ～犠牲にする家畜を用意する。雌雄は問わないが白い羊を一匹用意する。

・モボゴチュ～この儀礼はとて複雑であるが、二つの意味がある。一つは人が亡くなると鬼になるので、畢摩を招いて鬼を追い出す意味であり、もう一つは死者を超度するという意味である。この村では一昨日(9月25日)、年寄が亡くなったばかりである。もし亡くなった人が生

前によく病気をしたり、伝染病だったりした場合に、この儀礼をすれば、子孫に悪い影響を与えないという。また夫婦の場合には、残った者に悪い影響を与えないし、先だった夫（妻）がいるときには魂が追いかけて一緒になれるという。

- ・ガザイエザタ～供物、供品の意味。卵（煮たもの）、豚肉（彝族正月で残った豚肉を煮たもの。通常、正月の残りの豚肉は次の春節に入る大晦日に食べる）、酒、タバコ、そのほか死者が生前に使用していた銃や銃の玉などを供える。
- ・ゴンズゴング～これは悲しみを表すと同時に、他方で喜びも表している。彝族では、年寄が亡くなることをおめでたいことと考え、年配者が長く生き続けるのはむしろよくないことと考えているという。まず招かれた親戚の者が泣くが、これは悲しみを表す。主人が親戚にもうよいといってさまざまな御馳走を食べさせる。こちらは喜びである。この儀礼に畢摩は関与せず、同じ家支や近隣の人が担当する。嫁いだ娘も帰ってくるが、この際に一頭の牛と羊、それに酒を持ってくる。その羊を連れて来た時、畢摩が経文を読むが、これをムップという。2杯の酒を用意し、一杯は連れてきた娘に、もう一杯は死者にかける。もし娘が多ければ、互いに競争して多くもってきた。たとえば、牛は元気でより大きいものを連れてくるとか、きれいに洗ってくるとかで競った。現在は、牛を赤い布で飾り、角にお金を縛ったりすることも、豊かになったので行っている。しかし、いかに多くのものをもってきても、やはり長女から年の順に並べるといふ。
- ・ゴシャッポ～葬儀のこと。この中に、イークァというもう一つの儀礼がある。これは招くという意味で、死者の魂を遺体と一緒に引っ張っていく儀礼で、年寄が亡くなると畢摩が白布と黒布を用いて行く。白布を2枚用意し、うち一枚を黒色に染める。それから卵を2つ用意して、その卵で各布をなぜ回す。儀礼が終わると、黒布とそれをなぜた卵は遺体と一緒に送りだし火葬場で焼き、白布は主人に手渡して保存され、白い方の卵は孫などに食べさせるという。遺体はチク（架子）を使用して二人で火葬場まで運ぶ。自分の家の山の方の土地（畑）を火葬場に意図的に選んで火葬する。火葬場の方向は、死者のもつ方角やいつ亡くなったかなどということから畢摩が決める。遺体を焼く時の頭の方角は、死者の干支で数えて決める。男性は東から時計回りに八方位を順に数え、女性は西北から反時計回りに数える。女性は生まれたときの母親の年齢で、男性は死亡時の年齢だけ数えて方角を決めるという。葬式には男女ともみな参加するが、恥ずかしいので男同志、女同志でかたまって一緒にならないし、一族の間では笑い話なども互いにしないという。一般的に死者の家に葬式に行く時は一番きれいな服装をしていく、そのような人が何人かいると葬式だとわかる。実際には、かぶっている帽子で判断する。遺体には白い下着を使用するという。火をつけたら、殺した羊などもらったものを火葬場にもって行ってみんなで食べる。遺体は生木を使って火葬する。必ず焼けるという。ただ焼くだけで、木や石などの数について決まりはない。朝11時頃に焼きはじめ、夕方5～6時には終わる。遺体は早く焼きつくすと喜んで早くあの世に帰るが、長く時間がかかると死者は行きたがらないという諺もある。火葬の途中で、遺体が起き上がったたりすると、叱ったり棒でなぐったりする。

火葬が終わると、遺骨は拾う場合もあるし、そのままにして拾わないこともある。骨を拾った場合には、山の方のきれいな竹の生えているところにする。竹のあるところは、犬や猫の入らない静かなきれいな場所とされており、そういうところに遺骨を撒くのである。葬儀は、お金があれば3日間行い、なければ2日間行うという。

- ・ニムツビ～作斎（祖霊祭）のこと。人が亡くなって1～2年たつと行う。この儀礼はとても複雑で畢摩に聞かないと詳しくはわからない。この儀礼は14の段階があり、もっとも盛大な場合は多数の家畜を犠牲にし9天9夜（まるまる9日間）もかかる。

このとき、マッド（位牌）を作り、終了後は囲炉裏の後ろの柱（グゼヤ）の一番上のガブコというところに掛ける。祖父のマッドは父が、父親のマッドは子供が送り、一生に一回祖霊を送る。マッドは男女とも作り、上の世代の人が亡くなると次の世代のものに代える。古い世代のマッドは、高い山の洞窟に納める。一緒に暮らしていた家族は同じところに納め、場所は各家で選ぶという。古いマッドを洞窟に納める時に、ウプシという儀礼を畢摩がきて行う。杉（松？）をたてて行い、昔は犠牲の家畜を供えていたが今は供えていない。

- ・ニムツビで「指路経」を読む際に、祖先の行く道を示すために白糸を使用する。抜けた魂を招く儀礼でも白糸を使う。魂を浄化する儀礼では、黒色から花（白黒まだら）を経て白色になるという順にプロセスを踏んで行く。色彩とくに白と黒の象徴的な意味は、彝族の儀礼や靈魂観を解明する上で非常に重要なものと考えられる。白はアッチョといい、彝族で一番重要な色であり、幅広く使われる。黒はアッノ、赤はアニン、青はアッパ、緑はアッコ、黄はアッシ、灰はズッポ、花（まだら）はボセ（百色）という。服装も白色がよく使われる。とくに男子の上着や女子のスカート（裙子）も白色が多く使われる。黒もまた日常好まれている色である。ただし畢摩の行う神判などの場合には、被疑者は潔白を表す白い服を着、疑う方の人は黒色を着ていく。神判では、白い雄鶏1羽、白い雄牛1頭、白い雄羊1匹を用意し、犠牲にし煮て参観者と一緒に食べる。畢摩が潔白かどうか経を読み、被疑者がそれらの家畜の肉を食べたなら潔白だとされる。もし食べないと、神判し疑われる。彝族の人は神判で疑われるのを恐れている。疑う人が、調停人に知らせ、その人が被疑者を連れてくる。熱い湯の中の石を手で火傷せずに取り出せれば潔白とされる（ジングトという神判）。儀礼では、黒は汚い色とされ、畢摩が洗って花色さらに白色と浄化していくのである。なお、黒彝と白彝の区別は彝族自身が分けたものではなく、白彝のチュネと、黒彝のゴホという家支があるだけで彝族の認識にはないようである。

③美姑県合姑洛村。話者は畢摩の井吉漢日（29才）。

[葬式]

- ・ツチャ儀礼～慢性病が原因で亡くなった場合、死者に良い服を着せて羊を連れて行ってツチャという儀礼を行う。これは死者が鬼にならないようにするためである。はじめ家族は泣いてはいけないという。この儀礼は、まずチョーイといって柳樹を4本挿す。次に綿羊、母鶏（雌鶏）、茅草（ツツ）一束を用意する。畢摩は片手に茅草をもち、もう片方の手に鶏をもつ。羊は声を

たてないように首をひねって殺し、そばに置いておく。

その羊がまだ完全に死にきらないうちに、畢摩は経をよむ。その経文は、死者の名前をいってから、お前は死んでしまった。まだ焼いていないが、お前にはもう羊しかない。だから、それをさしあげますという内容である。そのあとに、ツチャの内容を唱える。お前は亡くなった。まだ焼いておらず、骨も灰になっていない。煙りも雲になっていない。だから、ここで綿羊を食べなさい。要するに、これは靈魂は遠くに行っておらず、羊の肉を食べなさいという意味である。それから、羊の解体にかかる。羊を解体して肉を煮たあと、まずその内臓から食べる。その時、草人形（5寸位）を作る。死者が男性なら男の人形、女性なら女の人形にする。羊の左肩の肉と右肋骨の肉を少し取って、お経を唱えながら、草人形にさす。それが終わると、親族の者は死者に羊の煮た肉を供える。これがすむと、畢摩は後ろを振り返らずに帰る。その時、家族ははじめて泣き始める。このツチャ儀礼は、屋内の入口を入れて左側の部屋で行う。

- ・モモ儀礼～人が亡くなって、ニムツビを行えない低い経済状態の家では、火葬の前にこのモモという儀礼を行う。これは、葬族の祖先たちが集まるモンブグァというところに死者の霊を送る儀礼である。ニムツビを行える家でも、死霊を招いてモモ儀礼をする。この儀礼は、遺体を火葬する前に、火葬の準備をしている間に家の門の前で行う。まず家の門の外側に柳樹を5本ずつ2列にさす。その後、遺体を家屋から門の内側まで移動し、親族からの供物を遺体の前に供える。その時、畢摩は白酒をもち、モンブグァに霊を送るという内容の経をよむ。死者の靈魂を祖先の国に送る経を読み終わると、火葬場に行って火葬する。畢摩は火葬場には行かない。
- ・ニュツシ儀礼～遺体を火葬する当日、遺体が家を出るとすぐに、家族や親戚の者はニュツシという鬼払いの儀礼を行う。なぜなら、死者は鬼のせいであつたからである。この赴鬼（鬼払い）儀礼では、Y字形の樹と竹を削ったもの各一本と鶏（性別や大小は不問）一羽を用意する。畢摩は鶏を手にもち、焼いた石を水を張った木椀に入れて蒸気をたてて清める。その際、モシモというお経を読む。これは、お前は死んだが、焼かれた後に鬼にならないようにという内容である。次に、ムシビやニビビというお経を読む。そのあと、鶏の首を叩く。これは鬼を叩く意味である。鶏の嘴と両側の羽を切り取って竹にさし、それに鶏の血や羽毛もふりかける。鶏の肉を食べた後、お経を読む畢摩のまわりを主人側の親戚が時計回りに3回まわる。そのあと、鶏の首と羽をさした竹を家の入口に魔除けとして差し込むが、鶏の頭は遺体を焼く方向に向ける。これで儀礼は終わる。
- ・火葬後の処理。遺体を火葬した後の遺灰は、山の一番きれいなところに撒く。頭骨や手足の骨を少し拾って、山の岩穴の人に見つからない秘密の場所に納めることもある。また焼いた場所に穴を掘って埋める場合もある。

火葬場は自然にできていてほとんどが山の上の方にある。正常死の場合は上の方で、異常死の場合は下の方で火葬する。正常死も異常死もほぼ同じ儀礼であるが、異常死の場合には他のお経も読むので、畢摩に払う報酬は異常死の方が高いという。異常な死者のニムツビをツピグビというが、内容は同じでも異常な死者にはお経をあげたがらないので、報酬が多いらしい。異

常死の者でも祖先の国に行くことができる。

- ・ニムツビ儀礼～この儀礼は一般に3日間かかり、死者の靈魂をモンブグァ（祖先の国）に送るものである。死後、3ヶ月後にすることもあれば、3代後に行くこともある。主人の家です。兄弟の場合は末弟の家で、一人子の場合は自分の家です。儀礼の日取や場所は、死者の遺族の経済力や、吉日や吉年などによって決まる。ニムツビでは、必ず指路経を読む。3日間のうち最終日の最後の儀礼で読む。この経を唱えてから、ウブ（位牌）をグップ（小さなお棺の形をしたもの）の中に入れ、家族ごとに決まっている山の洞窟に納める。これが終わると、おめでたいよい言葉を言って、主人の家に入り酒を一杯飲む。家族は畢摩を道端で送る。なお、大小涼山の畢摩は祖先の国モンブグァが雲南省内にあると言っている。この儀礼は複雑で短時間では詳しく話せないという。

第1日目は、とても儀礼が複雑で、翌日までいっても終わらないほど多くの経がある。羊の骨を焼いて、どの畢摩を招いたら吉かを卜占する。そして畢摩を屋内に招き、まずソバブという鬼の像を作る。このあと、ジョピンブツという樹を12本さす。6本はY字形にしたもの、残りの6本はそのままの樹枝をさす。次に、屋内に豚を連れてくる。屋外で石を焼き、水をはった木椀に入れて蒸気をたてて、それで屋内を一回りして清める。準備が整うと、お経を唱えはじめて、豚を殺す。豚の内臓はすべて畢摩がとり、肉は家族がとる。この儀礼は必ず晩方に行い、多い場合には畢摩が30人まで来ることができる。どこかで夜にこの儀礼があると聞きつけると、畢摩が豚の内臓を食べにやってくる。食べ終わると、畢摩たちはソバヤソバブなど多くの鬼を対象としてお経を読み、鶏が鳴く日の出まで徹夜で読みつづける。

第2日目は、死者の墓の前で、グツグトという儀礼をし、そのあとナーシエという儀礼をして終える。グツグトとは、墓で死者の靈魂を起こす儀礼であり、霊が起きるとナーシエ（人形で象徴する）になる。死者の靈魂がナーシエになると、自分である世に去って行く。グツグトの際には、豚1匹、鶏3羽、母鶏（雌鶏）羽を犠牲にし、水や酒も供えて、これらの供物を撒いて靈魂を起こすのだという。

第3日目には、畢摩がウブ（位牌）を小さな竹（ナーシエ）で作ってグップの中に入れる。夫婦が二人とも亡くなってからニムツビを行うので、夫婦2体を象徴する男女の人形を作る。男の人形（位牌）は羊毛で天菩薩の髪型にし、紅糸で腰を外側に7回縛り正面で結ぶ。女の人形はおさげ髪にし藍糸で腰を内側に9回縛り横で結ぶ。グップはグンジェという樹木で作られ、男（夫）を左に、女（妻）を右にして入れ、夫婦の人形の間には本物の銀粒を納める。金持ちの場合には、金の粒を入れることもある。これはあの世で使う旅費であり、グップにはこの他のものは入れない。崖の岩穴にグップを送る専門の人をチョモといい、一番近い親戚ではなく、遠い親戚の人がなって送る。チョモがウブのはいったグップをもって先頭に立ち、親戚の者が後につづく。岩穴に着くと、チョモの頬を一発叩いてから髪为天菩薩をもって内側に回って帰る。死者の靈魂が永遠に戻らないようにするためだという。ウブを岩穴に一度納めたら、もう二度と触れることはしないという。



95/9/22 三河村
赤ん坊の頭飾り



95/9/23 基偉村
村の娘さん



95/9/23 同上, 基偉村
村の老人